

2008年度研究チーム報告

クライナー, ヨーゼフ / 小口, 雅史 / 王, 敏 / 安孫子, 信

(出版者 / Publisher)

法政大学国際日本学研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学

(巻 / Volume)

7

(開始ページ / Start Page)

215

(終了ページ / End Page)

234

(発行年 / Year)

2009-10-29

2008年度研究チーム報告

- サブ・プロジェクト① 安孫子 信 … 215
- サブ・プロジェクト② 王 敏 … 219
- サブ・プロジェクト③ ヨーゼフ・クライナー … 224
- サブ・プロジェクト④ 小口 雅史 … 231

サブ・プロジェクト① 2008年度研究活動報告

プロジェクト・リーダー：安孫子 信

「異文化研究としての『日本学』の構築」

日本と日本文化とを内外の二つの視点から同時に照射し、そこにこれまでにない立体的な視像を得ていこうという「国際日本学」の試みを、そのものとして引き継ぐのが本サブ・プロジェクトである。活動の形態としても、COEプログラム下で展開されてきたものを踏襲し、年に一度、内外ほぼ同数の提題者を招聘しての国際シンポジウムを開催することを軸に、活動を展開している。

まず初年度2007年には、そのような「国際日本学」の方法論から生じるであろう原理的・理論的な問題を問うことを引き続いて行った。すなわち、「国際日本学」を掲げた国際シンポジウムは、COEプログラム下の2005年のパリ・シンポジウムから始めて（「日本学とは何か」於：パリ日本文化会館）、2006年東京・シンポジウム（「ことばとことばを越えるもの」於：法政大学）と引き続いていたが、2007年にはやはり原理的問題の一つ、「翻訳不可能性」の問題を扱う国際シンポジウムを、フランスのアルザスで行ったのである（於：アルザス欧州日本学研究所）。そのような基礎作業を踏まえて、「国際日本学」の方法論をいよいよ具体的に適用することの第一弾として、「日本文化の中の天皇一天皇とは？」をテーマに行われたのが、2008年10月30日－11月1日のアルザス・シンポジウムであった（於：アルザス欧州日本学研究所）。

日本の社会や政治を論じる際に、天皇や天皇制を語らずに済ますことは無論できない。他方で、日本の文化を比較的狭く論じる際にも、天皇および天皇制との関わりを無視することは恐らくできないのである。日本文化は、それが産みだしたものの多くで、天皇および天皇制を様々に扱ってきたし、また天皇および天皇制は、日本の文化が何かを産みだす作業そのものに、潜在的に、様々な影響を与え続けてきたのである。日本の文化的産出力の行く末が世界基準できびしく問われている今日、「日本の文化が文化であること、また文化であり続けていることに、これまで天皇および天皇制はどんな役割を果たしてきたのか、また今後どんな役割を果たしうるのか」をあらためて問うことは無意味ではないのである。

しかも、日本の特殊性のいわば象徴ともされている天皇および天皇制の問題は、内外からの視点をすり合わせる、いわば試金石の位置を占めるものとも言いえよう。天皇および天皇制についての内からの視点に関して言えば、そこで語られることがどこまで客観的・普遍的なものとなりえているかが常に問われる。他方、外からの視点に関して言えば、そこで語られることがどこまで問題の特殊性に達しているのかがやはり常に問われる。

このような問題のむずかしさ、重さに鑑みて、2008年にはシンポジウムに先立ち3回の勉強会も執り行った。それぞれの回に日本史の専門家にお越しいただき、歴史的に見た場合の日本の天皇・天皇制の特徴について、詳しくレクチャーをしていただいた。3回のテーマと講師は以下である。①6月14日「中世における天皇について」(法政大学・河内祥輔氏)、②7月12日「『王権』研究の現状」(専修大学・荒木敏夫氏)、③9月27日「二つの『密教』と二つの『顕教』—日本憲政史の中の天皇」(東京大学・坂野潤治氏)

さてこのような準備も経ての3日間のアルザス・シンポジウムでは、日本(法政)から参加の8名(小口雅史、王敏、田中優子、ヨーゼフ・クライナー、相良匡俊、安孫子信、星野勉、市村弘正)とヨーロッパから参加の7名(François MACE [パリ INALCO]、Bernard SCHEID [オーストリア科学アカデミー]、André KLEIN [アルザス CEEJA]、John BREEN [京都日文研]、Josef KYBURZ [パリ CNRS]、Sepp LINHART [ウィーン大学]、Eric SEIZELET [パリ・デイドロ大学])の計15名が研究発表を行い、また各発表後には参加者間で、またフロアへの聴講者も交えて、活発な議論が展開された。

発表の大まかな内訳を述べれば、時代的には、主に古代天皇・天皇制を扱った発表が2編(小口、MACE)、江戸時代のそれを扱ったものが1編(田中)、明治の天皇・天皇制を扱ったものが3編(相良、BREEN、安孫子)、明治以降昭和までの諸天皇を扱ったものが3編(王、KYBURZ、LINHART)、昭和の天皇・天皇制を扱ったものが3編(星野、市村、SEIZELET)、通史的であったものが1編(SCHEID)、他の王政との比較を行ったものが2編(KREINER、KLEIN)であった。またベースにしている学問領域も多様で、大まかな線引きにとどまるが、歴史学に基づくものが6編(小口、MACE、KLEIN、相良、

BREEN、SEIZELET)、文学に基づくものが2編(田中、王)、社会学に基づくものが1編(LINHARD)、思想史・哲学に基づくものが4編(SCHEID、安孫子、星野、市村)、人類学に基づくものが2編(KREINER、KYBURZ)と一応区分されよう。以上に加えて、発表と討議の言語も多様で、日本語、英語にフランス語が入り混じるといった状態でシンポジウムは進行されていた。

このような細部の報告をするのは、このようなことが、国際日本学の現在の到達点を、具体的に、かつ積極的に示していると考えからである。これだけ多様な視点やベースから出発し、これだけ多様なテーマを通して、天皇・天皇制が3日間徹底して論じられたのである。そのことで、参加者はほぼ全員がいわば思いがけない仕方で学問的な視野を拡大させ考察を深化させたといえる。そのことの意味は大きい。思いがけない発見があったということは、真の発見があったということでもある。それを各参加者はそれぞれの場所で改めて咀嚼し直して、近い将来に、新しい成果を必ず公にしていくであろう。このように学問的な開きを至るところにもたらすことこそが、「国際日本学」の目指すところであり、今後は、事前の準備も含めて、このような国際的かつ学際的な学問的エンカウンターの場合設定の精度を高めて、そのような思いがけない成果が、しかし常に必ず安定して得られるよう、工夫を重ねていきたい。

さて、このような多様な発表が押しなべて扱ったのは、もちろん天皇・天皇制の問題であるが、さらに言えば、その、現実的(政治的)でありながら、また同時に独特な仕方で聖的(文化的・宗教的)であるという二重の性格である。この面で具体的な議論の簡単な紹介を行えば、以下ようになる。

①中国皇帝に関するものとの比較で、日本の天皇に関する律令規定を読み解き、日本の天皇に、役割としての神聖性がどこでどのように賦与されていたか、その過程を明らかにしようとしたもの(小口)や、日本の天皇の聖俗の二面性の成立を天武朝の事跡全般の検討を通じて再確認しようとしたものがあった(MACE)。

②江戸時代の天皇の存続がやはりその二重性のもとにあったと指摘し、「直し」と呼ばれたその際の神聖性の内実がどのようなものかを明らかにしよう

としたものがあつた（田中）。

③天皇の神聖性は決して宗教とはならずに一貫して儀式的なものにとどまり続けたとし、それに相応する、神道における、文化的伝統の担い手を自認はするが宗教へは向かわない傾向の確認を行ったものがあつた（SCHEID）。

④日本の天皇の神聖性の特徴を、神聖ローマ帝国皇帝のそれ（KLEIN）、また、沖縄王朝王のそれ（KREINER）と比較検討したものがあつた。

⑤明治天皇の神聖性の確立維持にイメージ（写真・絵）がどのような貢献をなしたか（相良）、また逆に、外国（特に戦争相手国）では同じイメージ（絵葉書）が日本の明治以降の天皇の神聖性破壊にどう貢献したか（LINHART）を、実例で説明したものがあつた。

⑥明治天皇の内外での神聖性の確立に勲章制度が果たした役割を明らかにしたもの（BREEN）、また、お印という制度が日本の天皇に、きわめて独特な神聖性を与えていると指摘したものがあつた（王）。

⑦神聖性の陰で、それでは天皇の身体・身体性はどう見られ、どう語られてきたかを、明治以降昭和に至るまでの3人の天皇に関して、明らかにしようとしたものがあつた（KYBURZ）。

⑧それ自身一つの神聖性とも言いえる新憲法での象徴天皇規定が、どのような政治的力関係の下で、どのような過程で導入されるに至ったのかを明らかにしようとしたものがあつた（SEIZELET）。

⑨たとえば西周（安孫子）や和辻哲郎（星野）、さらに丸山真男・藤田省三（市村）といった明治以降現代に至るまでの哲学・思想の主だった担い手たちが、天皇、とくに天皇の神聖性と思想的にどのように戦い、しかしどのように折り合っていたかを吟味したものがあつた。

2008年アルザス・シンポジウムは、天皇・天皇制問題の大きさと複雑さ、にもかかわらず、国際日本学の方法論の力強さと有効性とを再認識させてくれるものであつたと考える。

サブ・プロジェクト② 2008年度研究活動報告

プロジェクト・チーフ：王 敏

1. サブ・プロジェクト②の研究目的

本研究の基本コンセプトにかかわる研究目的は次の二つである。

一つは、外国の日本学研究者（＝他者）の視点を取り入れて、日本文化をより科学的に理解、研究するための「ジャパン・テクノロジー（日本学）」の構築を固めたいものである。内向きの閉鎖的な研究姿勢と希薄な方法論という、日本の人文科学研究の旧弊を打破するには、内外の研究視点の補完という不可欠の方法論によって、国際的・学際的な共同研究のあるべきモデルを提示する。

もう一つは、他者の視点による「異文化」という観点から日本文化を再発見・再発掘し、日本文化研究に新局面を切り拓くことにある。日本文化は、中国、朝鮮などの東アジア地域文化、近代以降は欧米を中心にした「異文化」の影響を直接・間接に受けながら形成された混成文化というところに特性があると思われる。一方、それを成す普遍性と地域性の有機関連は地球化の加速に一定の啓発に与えるものがあると考えられる。それを整理し提示する。

2. サブ・プロジェクト②の研究課題と地域

上記の研究目的に沿って、同研究プロジェクトのサブ・プロジェクト②はここ数年東アジア地域における日本研究を研究対象に「日本文化への問いかけとその解題」を課題にし、同課題をめぐる研究活動を進めている。同研究の成果を確実にするために、三年計画を立てている。さらに各年度の研究課題を次のように設定してある。

2007年度 日本文化への問いかけ及びその解題…その1 「外（東アジア）」の視点

2008年度 日本文化への問いかけ及びその解題…その2「内（日本）」の視点

2009年度 日本文化への問いかけ及びその解題…その3「研究メンバー（推進委員を中心に）」の視点

3. 実施状況について

2008年度の課題・「外」の視点にあたって主に以下の活動をしてきた。

- (1) 東アジア研究のネットワークづくりを続けている。
- (2) 中国における日本研究を中心とした研究叢書の出版準備中であり、2009年3月末に発行予定である（既刊）。叢書の目次と、著者については以下のとおりである。

【国際日本学研究叢書9】

『中国人の日本観と日本研究—相互理解としての日本研究—』

目次

コンセプト 王敏

I 中国における日本研究の概略

中国の日本研究—回顧と展望—

李玉（翻訳：坂部晶子）

中国の日本史研究—日本研究論者の統計的分析を中心に—

李玉（翻訳：坂部晶子）

現代中国における日本文学の紹介—日本文化の一環として—

王敏

II 時代を追う日本観の変容

唐楽詩人の「日本」の想像

葉国良（翻訳：林恵子）

近代における中国人の日本観の変遷

王曉秋（翻訳：王雪萍）

日本留学時期の周恩来の日本観—『周恩来旅日日記』を手がかりに

胡鳴

近代文化論から見た李春生の日本観—『主津新集』と『東遊六十四日隨筆』を中心に

徐興慶

20世紀10 - 20年代中国の教科書に見る日本像—民国臨時政府 - 南京政府成立まで—

徐冰

中国映画の中の日本人像

孫雪梅（翻訳：玉腰辰巳）

Ⅲ 受容された日本の文学と言語

中国近代文学の発生と発展における中日関係—文化交流から生存体験まで
（概要）—

李怡（翻訳：及川淳子）

清末民初における日本語文学漢訳題材の特徴を論じる

付建舟（翻訳：小池陽）

五四時期の小詩による俳句の取り込みについての総論

羅振亜（翻訳：金澤妙）

「憂い顔の童子」—森に住む孤独の騎士

許金龍（翻訳：石岡陶子）

僑詞の帰順と近代中日文化の相互作用—「衛生」、「物理」、「小説」を例に—

馮天瑜（翻訳：及川淳子）

Ⅳ 日中文化研究

新しい日本と新しい中国とを結ぶべき紐—陶晶孫『日本への遺書』を読む—

楊劍龍（翻訳：孫軍悦）

新渡戸稲造と日本の文化外交

劉岸偉

中国人の日本における国際理解に関する研究

楊暁文

「変節」に寛容な日本的現象—「変節」「転向」考察その1—

王敏

転向と向き合う作家・辻井喬論—「変節」「転向」考察その2—

王敏

- (3) 2006年以來の東アジア文化研究会を月に一度の開催を継続し、国内の専門家を迎え、研究の広がりや深まりを求めている。2008年度の東アジア文化研究会は計10回開催した。

法政大学国際日本学研究所 2008年度東アジア文化研究会、シンポジウム一覧

於：法政大学市ヶ谷キャンパス

日程	報告者／肩書き	テーマ
第1回 2008.4.28(月)	伊藤亞人 氏 琉球大学大学院人文社会科学部研究科教授	「日本社会・日本文化の周縁性と特異性」
第2回 2008.5.14(水)	赤坂憲雄 氏 東北芸術工科大・同大学東北文化研究センター所長	「青潮文化論は可能か」
第3回 2008.6.6(金)	小倉紀蔵 氏 京都大学大学院 人間・環境学研究科准教授	「2・1・0-東アジアの文化・文明論的構造」
第4回 2008.7.7(月)	徐 興慶 氏 台湾大学文学院日本語文学系教授	「台湾における日本研究：日本文化史研究から考える」
第5回 2008.8.1(金)	小針 進 氏 静岡県立大学国際関係学部教授	「韓流をどう位置づけるか」
第6回 2008.9.18(木)	劉 建輝 氏 国際日本文化研究センター准教授	「支え合う近代～日中二百年の再検証～」
第7回 2008.10.10(金)	辻本雅史 氏 京都大学大学院教育学研究科教授	「思想史研究における『知の伝達』とメディアー江戸思想を素材として」
第8回 2008.11.11(火)	西原春夫 氏 アジア平和貢献センター、早稲田大学名誉教授・元総長	近代日本のアジア侵略 —その歴史背景を大きな近代史の流れの中でとらえなおす—
第9回 2008.12.3(水)	代田智明 氏 東京大学大学院総合文化研究科教授	社会主義という資本主義的社会と資本主義 という社会主義的社会 —中国文化と日本文化—
第10回 2009.1.16(金)	法政大学国際日本学研究所・東アジア出版人会議 基調講演、市村弘正・法政大学法学部教授 参加者は、報告者を含めて30人余	東アジア読書共同体の構築は可能か？

注：第10回のシンポジウムは、サブ・プロジェクトのみならず国際日本学研究所全体のシンポジウムとして、東アジア出版人会議と共催で開催された。

4. 発表刊行物

(1) 研究成果に関する刊行物一覧

【法政大学の「国際日本学研究」として配布している刊行物】

- ①国際日本研究叢書『中国人の日本観と日本研究—相互理解としての日本研究』
(法政大学国際日本学研究所、2008年3月)
- ②『国際日本学』第5号(法政大学国際日本学研究所、2007年5月)
- ③『日本文化への問いかけ—事例調査及び調査集計結果』(未公開・2007年4月)
- ④『国際日本学』第6号(法政大学国際日本学研究所、2009年3月)

(2) 同研究の成果を中心に学ぶ中国政府派遣若手研究者2名を受け入れた。うち1名(中国社会科学院日本研究所)は「戦後日本の平和思想」というテーマ

が認められて日本国際交流基金の日本学フェロー基金の支援を受けている。もう一名の客員研究員である謝宗睿（国務院国家発展センター欧州アジア研究所 助理研究員）は、現在当研究所にて日本文化研究を行っている。

以上が2008年度におけるサブ・プロジェクト②の研究報告である。「日本文化への問いかけと解題」を模索する発展途上に終始したものである。

サブ・プロジェクト③ 2008年度研究活動報告

プロジェクト・チーフ：ヨーゼフ・クライナー

第3プロジェクト「日本の中の異文化」では、律令国家の北周辺・南周辺で行われた異文化・異民族との接触の問題を昨年度の奄美大島で行われた研究会に引き続き今年度の主な研究テーマを「ヤマト国家の北辺の文化史」とし、それを中心とした二つの研究会を開いた。

その中心的なものは、2008年9月13～15日にかけて青森市の青森県埋蔵文化財調査センターで催された。中心となるテーマは北の境界祭祀遺跡として近年注目されている新田遺跡で、昨年度の奄美研究会との比較の意味でも重要な研究会となり、大きな成果をあげることができた。主たるテーマは、喜界島の城久遺跡の場合同様、この古代末期の北辺遺跡が「律令的かいなか（中央的かいなか）」である。なお第1回に続き、今回も北方交流史科研グループからの助力があり、若干の報告者の追加、コメンテーターの追加等が可能となった。

初日の午前、まず新田遺跡の現地見学を行った。残念ながら新幹線関連工事の進展とともに、景観は一変してしまっただが、遺跡の立地状況などは十分把握していただけた。

初日午後から研究会に入った。クライナーの開会挨拶、小口の基調報告「新田(1)(2)遺跡特別研究会開催の目的と意義」のあと、最初に発掘調査担当者である木村淳一・葛城和穂両氏より成果の紹介があった。それをうけて佐藤智生氏から考古学からの総括的なコメントがあり、ついで個別遺物の検討に入った。山田雄正氏（北方交流史科研）は「北奥における古代仏教関連遺物の出土とその意義」と題して、新田遺跡で注目を浴びている仏教関連遺物を、東北地方全体の中で位置づけ、新田遺跡の再評価の手がかりとした。また須藤弘敏氏は仏教美術史の立場から、仏像関連遺品について詳細な検討をほどこし、出土遺物の中から新たにいくつかの仏像部品を見だし、仏像5体分の要素がみられること、仁王の一部とみられるものがあることから山門の存在が推定されることなどを興味深く論じた。ついで新田遺跡から出土した日本最北の古代「木簡」について、渡辺晃宏氏が専門家の立場から論じた。結論的には、外見的には木簡の形態をしているが、判然としない墨書が、木簡状の形態となる以

前に書かれたものである可能性が高いことなどから、木筒状木製品ではあっても木筒とはいえないことを論じた（では実際に何に使われたのかについては会場からいくつかの見解が示された）。これは小口のかねての見解とも一致し、新田遺跡の再評価に当たっての一つの重要な論点となった。

2日目には、山田祐子氏から「米代川河口域における祭祀の実態」と題して、立地出土品とも似ている近在の秋田の樋口遺跡その他の祭祀関連遺跡についての報告があった。ついで宇部則保氏から「北辺地域における7～10世紀の在地・律令的土器様相」と題して、新田遺跡を含む北東北の土器の様相について、律令的かいなか、という当方の希望に応じた報告があった。以上の北の報告を受けて、次に南の中島恒次郎氏から「考古資料から考える遺跡性格」と題して、大宰府・国府・郡家・集落を土器からどのように区別するかという興味深い報告があった。その観点からすると城久遺跡は律令的色彩が強く、遣唐使関連の基地的要素があることをも示唆された。またカムイ焼きとの比較で、南の視点から見た五所川原須恵器についてもコメントしていただいた。そして最後に昨年度の奄美研究会に出席された南の新里貴之氏、高梨修氏、澄田直敏氏からも全体を通じてのコメントがあった。

総括討論では、さらにさまざまな意見交換がなされ、結果として、この一連の研究が目的とする古代から中世にかけての時期に、日本国家の北辺と南辺に、いわゆる異文化接触はどのような形でおこなわれていたか、どのようなものがあったか、またその地域の大和民族・文化にどのような影響を及ぼしたのかという問題に一步近づくことができたのではないと言える。

研究会終了後は三内丸山遺跡見学班とツガルのカミサマ面談班とに分かれ実地研修を積んだ。また3日目には津軽半島部の古代遺跡（小牧野遺跡・高屋敷館遺跡・五所川原窯跡）を見学し、さらに中泊町博物館で青森県出土の擦文土器を十分に検討した上で、散会となった。

- 報告者 木村 淳一 氏（青森市教育委員会）
 葛城 和穂 氏（青森県埋蔵文化財調査センター）
 佐藤 智生 氏（青森県埋蔵文化財調査センター）
 山田 雄正 氏（前青森県埋蔵文化財調査センター）
 須藤 弘敏 氏（弘前大学）

渡辺 晃宏 氏 (奈良国立文化財研究所)
山田 祐子 氏 (秋田県埋蔵文化財センター)
宇部 則保 氏 (八戸市教育委員会)
中島恒次郎 氏 (太宰府市教育委員会)
高梨 修 氏 (奄美市教育委員会)
澄田 直敏 氏 (喜界町教育委員会)
新里 貴之 氏 (鹿児島大学)
J.クライナー 氏 (法政大学)
小口 雅史 氏 (法政大学)

それに先立って、2008年8月31日～9月2日に、小口雅史を中心としたグループが奥尻島(北海道奥尻郡奥尻町)にて、本学関係者及び地元北海道、さらに岩手・宮城・石川県より計11名の研究者(北方交流科研グループも合流)が集まり、合同研究会を開催した。

法政大学側からは小口雅史、地元奥尻島からは木村哲朗氏、北海道からは瀬川拓郎氏、岩手県からは八木光則・伊藤博幸両氏、石川県からは小嶋芳孝氏の計6名が参加し、さらに同じ奥尻を研究テーマに取り上げている北方交流科研グループその他から、天野哲也・小野裕子・熊谷公男・中村和之・乾芳宏の各氏が参加した。

奥尻島は一説には古代史料に現れる津軽のさらに北と目される渡嶋の比定地と深く関わる場所ともいわれ、サハリンから南下したオホーツク文化が、本体はオホーツク海沿岸に広がる一方で、この奥尻島方面にも南下し、関連遺跡を残したという点で、きわめて特異な、北方交流史研究上重要な地点の一つである。そこでぜひ現地の遺跡を踏査し、それを踏まえた上で、古代の奥尻島をどのように理解し北方史ないし北方交流史上に位置づけるのかをテーマに研究会を企画した。本来は昨年度開催予定であったが、地元の受入の都合で本年に延びたものである。

8月31日は、木村哲朗氏の厚いご配慮で、オホーツク文化の遺物を出した青苗遺跡の出土品を特別に調査させていただいた。またその他、島内から出土したさまざまな様式の土器についても長時間にわたって精査させていただき、奥

尻島を独自の文化として位置づける、いわゆる「青苗文化」論の可能性を、実地に即して改めて検討した。

9月2日には、町の教育委員会のある海洋研修センター「ワラシャード21」会議室を提供していただき、そこで丸一日かけて、奥尻島の古代文化について、研究発表と討論を繰り返した。小口の問題提起「「古代渡嶋？」での開催にあたって」のあと、木村哲朗氏から「青苗砂丘遺跡の遺構と出土遺物について」と題して、オホーツク文化と深く関わる島内のもっとも注目される遺跡の紹介があった。また小嶋芳孝氏からは「7・8世紀のロシア沿海地方と北海道」と題して、奥尻島をロシア沿海州地方と北海道との関連でどのように位置づけるかという視点での報告があった。また青苗文化の提唱者瀬川拓郎からは「アイヌと和人の境界—中間領域の実態をめぐって—」と題して、和人との交易の基点としての奥尻島の位置付け、奥尻島に代表される小地域集団の存在について、その役割分析があった。最後に八木光則氏から「青苗文化論をめぐる二・三の疑問」と題して、奥尻島を独自の青苗文化圏と位置づける瀬川説について、本州の土器の研究者としての立場から、いくつかの確認事項が提起され、それをふまえて本州との交易の問題についての言及があった。

なお北方交流科研グループその他からの参加者の報告をあわせて紹介すると、中村和之氏から「女真の海の活動はいつまで続くか？」と題して奥尻島を取り巻く交易の世界の紹介が、また小野裕子氏から「古代の土器から見た幣賂弁嶋」ということで、奥尻島を含む北海道内の土器の地域差についての報告が、また天野哲也氏から「礼文島香深井1遺跡2号竪穴住人の行方—肅慎〔アシハセ〕論の新たな展開—」と題して、礼文島のオホーツク文化人が、奥尻島を経由してさらに佐渡まで南下した可能性についての言及があった。

報告の都度、関連する他の研究者からそれぞれコメントが出され、それを受け手の討論が繰り返された。また総括討論は、会場閉鎖後はホテルに戻って深夜にまで及ぶ活発なものとなった。

これらを通じて奥尻島および渡島半島地域の特性があらためて確認され、今後の北方交流世界解明のための重要な一里塚となったことは間違いない。北方世界全体の中での位置付けは来年度の総括の中で明らかにしていきたい。

9月2日には島内の遺跡を再度踏査後、散会となった。

報告者 木村 哲朗 氏 (奥尻島)
 瀬川 拓郎 氏 (北海道)
 八木 光則 氏 (岩手県)
 伊藤 博幸 氏 (岩手県)
 小嶋 芳孝 氏 (石川県)
 小口 雅史 氏 (法政大学 東京)

このサブ・プロジェクト③の中心的なアプローチは、考古学・中世史的なものである。しかし、2007年度の最初の合同研究会のときから言語学の問題も注目をあびて、特に間宮厚司氏(法政大学)と中本謙氏(琉球大学)から討論されてきた。その一連の討論の続きで、今度は間宮厚司氏を中心に、「日本の中の諸言語—アイヌ・ヤマト・琉球の言語生成—」というタイトルで言語学中心の合同研究会を開いた。これは法政大学の市ヶ谷キャンパスで開き、できるだけ法政大学の学生も参加できる可能性をつくった。

それに続いて5名の研究者を招き、アイヌ語と琉球語に関する最新の研究成果を披露したうえで、フリーディスカッションを行う旨、開会のあいさつがあった。

午前の部は、まず間宮厚司氏(法政大学)が「アイヌ語とヤマト語をめぐって」という題目で基調報告を行った。アイヌ語はかつて、北海道をはじめ樺太南部・千島列島・本州東北地方北部で話されていたと考えられるが、19世紀まで記録がなかったため、いかなる言語であったのか、詳細は知り得ないものの、縄文時代に日本列島で話されていた言語はアイヌ語の祖先以外に候補はなく、その後ヤマト語は大陸から朝鮮半島を経て弥生文化とともに北九州に入り、日本列島に広まるにつれ、アイヌ語は南から北へと移動させられたと推測できると述べた。次に、中川裕氏(千葉大学)は「アイヌ語と日本語の位置関係の謎」というタイトルで、言語類型論の研究成果からアイヌ語の特異性は、構造論的な観点からは説明できず、オーストロネシア諸語とアイヌ語の間に、ヤマト語が割って入ったと考えるなど、歴史的な説明が必須であると説く。続いて、見島恭子氏(早稲田大学)は「アイヌ語への日本(ヤマト)文化の影響」というタイトルで、北海道におけるアイヌ語とヤマト語の接触(12~13、14~16、16~18、19~20の各世紀ごとの状況)を概観した後、アイヌ口承文芸にアイヌ語

とヤマト語の対句が見られるなど、日本（ヤマト）文化の影響について論じた。そして自由討論を行い、アイヌ語内の方言差がヤマト語内の方言差と比較して小さい理由は、農耕民族でなく狩猟民族であったため、交流が盛んに行われた結果、地理的言語差が進まなかったものと推察される等々、話は多岐にわたった。

午後の部は、同じく間宮厚司氏の「ヤマト語と琉球語をめぐって」という基調報告から再開された。琉球にはかつて琉球王国（1429～1879年）が存在し、琉球語とヤマト語は別系統の言語であると明治頃まで思われていたが、比較言語学の研究から同系の言語ということが判明し、現在では日本語の一つの方言とみなされている。ヤマト語と琉球語が分離したのは弥生時代後期で、九州から琉球への移住が何度かあって、それが独自に発展していったとの説があり、有力視されている。しかしながら、琉球語は文献資料が15～16世紀にならないと現れないため、その言語の歩みは不明であると言わざるを得ない。最初に、パトリック・ハインリッヒ氏（ドイツ・ドゥイスブルク大学、現在、琉球大学）が「琉球言語史に歴史を加える」で、沖縄では狩猟採集社会から農業社会へ移行した9世紀頃を琉球語の言語形成期と考える。次いで、中本謙氏（琉球大学）は「琉球方言ハ行子音」で、琉球語に現れるパナ（鼻）などのP音は、古代の音が残存したものとされる通説に対し、単語によっては新たに生まれたP音も存在するのではないかとする見解を示した。最後に、ヒュー・クラーク氏（オーストラリア・シドニー大学、現在、早稲田大学）は「琉球語研究のいくつかの問題点」で、琉球諸方言の特徴と位置づけについて解説するとともに、『おもろさうし』の語学的な課題についても述べた。自由討論では、人々の異同（狩猟）と定着（農業）による言語生成のプロセス、『おもろさうし』の言語はヤマト語と共通性が多く比較的新しいのではないかといった提言など、活発な意見交換がなされた。

今後は、今回の言語研究会の成果を、考古学等の研究結果と重ね合わせ、そこから何が言い得るか、重層的かつ総合的に考究する必要がある。

報告者 中川 裕 氏（千葉大学）

児島 恭子 氏（早稲田大学）

パトリック・ハインリッヒ Patrick Heinrich 氏

（ドイツ・デュイスブルク大学、現在、琉球大学）

中本 謙 氏 (琉球大学)

ヒュー・クラーク Hugh Clark 氏

(オーストラリア・シドニー大学, 現在、早稲田大学)

間宮 厚司 氏 (法政大学)

このサブ・プロジェクト③が取り上げているテーマ、すなわち、古代から中世に転換する200～300年の間(10世紀から12、13世紀)律令(ヤマト国家)の辺境地帯における民族ないし文化接触の歴史的解明は、最近日本国内外に大きな注目をあびるようになってきている。イギリスで行われた琉球の先史時代並びに琉球王国の成立過程を取り上げた国際シンポジウムは、南島考古学の第一人者・ブリティッシュ・コロンビア大学教授のR.ピアソン(Pearson, Richard (ed.) (2009): *Okinawa; the Rise of an Island Kingdom. Archaeological and Cultural Perspectives. Proceedings of a Symposium, Kingdom of the Coral Seas, November 17, 2007, at the School of Oriental and African Studies, University of London. Oxford: British Archaeological Reports*)の編集で2009年オックスフォードで出版された。また、ドイツ・ミュンヘン大学のCOE「環シナ海中世史」の最終的な総括として行った国際シンポジウムはやはり琉球を中心とした先史考古学または環シナ海地域の中世史の諸問題を取り上げた(A. ショッテンハンマー Angela Schottenhammer (ed.): *The East Asian Mediterranean — Crossroads of Knowledge, Commerce, and Human Migration. Wiesbaden: Otto Harrassowitz 2008*)。この二つの国際学会には、本サブ・プロジェクト③研究者が発表・執筆者として参加した。

最後に、本研究に最初から参加していただいている鹿児島大学埋蔵文化財調査室助教授新里貴之氏は、「琉球列島先史時代における文化・社会の復元」の研究業績で第30回沖縄研究奨励賞を受賞された。

小口雅史

クライナー・ヨーゼフ

間宮厚司

サブ・プロジェクト④ 2008年度研究活動報告

プロジェクト・チーフ：小口 雅史

「電子図書館システムの構築」

電子図書館システムについては、当年度も引き続き既存のデータベースを改良・拡充するとともに、新規のデータベースの作成にもとりかかった。以下にその概要をまとめる。

当研究設置サーバー aterui 上の、既存の公開済みデータベースは以下の通りである。いずれも電子図書館関係をまとめたトップページ <http://aterui.i.hosei.ac.jp/service/> から入ることができる。

① デジタルライブラリ（国際日本学研究所・能楽研究所・沖縄文化研究所所有資料）

- ・ 国際日本学研究所所有資料 48 件
- ・ 能楽研究所所有資料 7097 件
- ・ 沖縄文化研究所所有資料 56 件

各研究所の所蔵する資料類の高精度画像をアップしてある。これらは日立製作所の電子図書館システムを利用して公開されている。

なおまもなくサーバーの更新時期を迎えるが、それにあわせてこれらのデータを精査した上で、主要なものを法政大学図書館のリポジトリに移管することを計画中である。

② 能楽研究所所蔵資料画像データベース [試験公開]

能楽研究所所蔵目録データベースとして、FileMaker V8.5 で作成され、それを aterui 上の FileMaker Server V8.5 を利用して Instant Web 公開したもの。能楽研究所の伊海孝充氏の手によって制作された。請求番号、分類、数量、書名（ローマ字付き）、トップ頁の画像、備考などからなる。現在 628 件がアップされている。

③ 北方史総合研究文献目録データベース

- ・北方史統合検索 [試行版]
- ・古代北方史関係研究文献目録データベース
- ・中世津軽安藤氏関係研究文献目録データベース [試行版]
- ・近世アイヌ史関係研究文献目録データベース [試行版]
- ・日本古代北方考古学関係研究文献目録データベース [岩手県分・試行版]

これらは古代～近世にかかる北方史関係の研究文献を網羅しようとするもので、すべて全文検索システム NAMAZU を利用して公開されている。

いずれのデータベースも日々、更新作業が続けられているが、このうち古代北方史関係研究文献目録データベースについては本格的運用が始まっている(他の試行版もとくに ID と Password 等による保護はかけていないので自由に閲覧できる)。担当者は小口雅史、当年度末の時点でデータ数は 19,062 件、NAMAZU によって生成されたキーワード数 62,316 個である。古代北方史関係研究文献目録データベース、中世津軽安藤氏関係研究文献目録データベース、近世アイヌ史関係研究文献目録データベースはいずれも同じデータ構造で組み立てられていて、著者名・論文名・備考・掲載誌等・編著・巻号・別誌名等・特集・刊行年月・出版社・所収再録書名・改題改稿・キーワード・史料・対象地域分類・既成目録・版本データ番号・漢字注記などからなる。またそこから法政大学 OPAC、あるいは国会図書館 NDL-OPAC での検索へのリンクボタンを前年に引き続き設置し、利便性を図っている。またこれら 3 つのデータベースはフォーマットを共有しているために、それぞれ個別のデータベースを越えた串刺し検索が可能である。それが北方史統合検索である。

また一般に研究文献よりも搜索しづらいとされる発掘成果報告書類についても綿密なデータベース化が学界より求められているが、とりあえずそれを岩手県分について試作してみたものが日本古代北方考古学関係研究文献目録データベース [岩手県分・試行版] である。これは岩手県が担当した発掘調査報告書を対象としており、引き続き、岩手県内市町村による発掘調査報告書の基礎情報を収集中である。まとまった市町村から公開を検討していきたい。

④日本古代史関係研究文献目録データベース [試行版]

これは③のデータベース類の内、とくに・古代北方史関係研究文献目録デー

データベース、中世津軽安藤氏関係研究文献目録データベースのデータ類を抽出した母体である大もとの汎用データベースの公開を模索するものである。総件数は18万件を越え、かなり大規模なものであり、現在様々なかたちで試行作業を続けている。問題は検索時に利用している辞書 kakashi の運用で、その整備にはなお時間を要する。現在は関係者によるテスト段階なのでIDとPasswordによって保護されていて、一般のユーザーは利用できない状態になっている。近時の公開を目指したい。

⑤在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録

20世紀初頭にプロイセンの探検家グリェンバーデルヤル・コック等によって将来され、現在、ベルリン国立図書館をはじめとしてベルリン市内の諸機関に架蔵されている吐魯番文書の完全電子カタログ。担当者は小口雅史。場所はベルリン、出土地は中国吐魯番、内容的には日本古代史と密接な関係を持つもので、国際日本学の一つの重要なテーマであると考え、その完全電子カタログをこのaterui上で公開することになった。これまでも何度か改変を加えてきたが、一応フォーマットはこれで落ち着くものと思われる。これもFileMaker V8.5で作成され、それをaterui上のFileMaker Server V8.5を利用してInstant Web公開している。データベースフォーマットの数次の改訂によって、飛び離れた番号をもつ文書断片の接続関係が発見されたときに、それらをつなぐ仕組みも導入された。また全文テキストを現在流し込み中で、完成すれば、世俗文書全体についてその内容にまで踏み込んで検索することができるようになり、これらの文書についての研究の飛躍的進展が期待される。

なおこれらの既存のデータベースに加え、本年度から新たに国際日本学の研究者について、世界規模でのデータベースの作成に入った。担当者は田中優子氏。現在、中国を中心に在アジアの研究者のデータが500件以上入力されている。まだ基礎的な入力段階であるが、入力項目としては、氏名、現職、専門、職歴、研究内容のキーワード、主な著作・論文、その他のプロフィール等となり、英語版も用意されている。現在研究所内で試験運用中であるが、早期の公開を目指したい。

その他、引き続き新しいデータベースの作成も随時呼びかけ中で、要請があればすぐ応じられる態勢を整えつつある。また懸案のサーバーの更新も学内の予算措置が執られ、来年度中に新サーバーが稼働する予定で、これまで以上に安定した運用が期待できる。